

■ 活動記録 ■

◆ 研究活動 ◆

2014年度先端社会研究所共同研究プロジェクト

指定プロジェクトの進捗状況報告

関西学院大学先端社会研究所では、「アジアにおける公共社会論の構想」を基本理念として研究活動を展開している。2012年度から三つの相補的プロジェクトとして「日本」班、「南アジア／インド」班、「中国国境域／雲南」班を定め、それぞれ個別の地域において共同研究を実施して、「排除」と「包摂」の二元論を超える社会調査に取り組んできた。

今年度は、共同プロジェクトの中間報告と位置づける全体研究会（『排除』と『包摂』の二元論をこえて——日本・雲南・インドのフィールドで考える）を2015年2月10日に開催し、各プロジェクト代表者がこれまでの研究成果を発表した。「南アジア／インド」班からは関根康正が「排除と包摂を超えて——インド社会をめぐるストリート人類学の視座から」、「中国国境域／雲南」班からは荻野昌弘が「近代は存在するのか——雲南省新平イ族タイ族自治県から見る社会」、そして「日本」班からは山泰幸が「排除と包摂のはざま——パリの 코리아系住民のフォークロア研究から」と題する報告をそれぞれ行い、ディスカッサントの奥野卓司（社会学部教授）、田禾（経済学部准教授）を交えて、各プロジェクトを横断した意見交換や議論の展開がなされた。

このように、共同研究の最終年度である2016年度に向けて、各班では調査データが蓄積され、また徐々に研究成果が現れつつある。以下では、各プロジェクトの進捗状況報告を掲載する。なお、報告は2015年度2月時点のものである。

◆ 「南アジア／インド班」プロジェクト

代表：関根 康正（関西学院大学社会学部教授）

南アジア／インド班の調査・研究活動も3年目を迎え、現代南アジア社会および南アジア系移民社会における「排除」と「包摂」をめぐる諸事象の具体的事例の収集・蓄積が進んでいる。また各班員による研究成果の公表も段階的に行われており、最終年度に向けた理論的展望もひらけつつある。今年度の海外調査は、鳥羽班員が2015年2月および3月に各1回、アメリカ、東南アジアをフィールドとして実施予定（2015年1月末現在）である。また班主催の定期研究会は、今年度は外部講師を2名招き2回開催した。班員による現地調査・文献研究の成果発表の蓄積が進んだこと、また二度の定期研究会での南アジアないし南アジア系移民を深くフィールドワークした講師の発表に刺激を受けて、非常に活発な討論が行われ研究上の多くの示唆を受けたことが、今年度の大きな成果であり、最終成果公表に向けた行程が明確に形をとって来たように思われる。その成果公表の方向性の一端は、班代表の関根が来る2月10日の全体研究会の中で、「排除と包摂を超えて—

インド社会をめぐるストリート人類学の視座から」と題して発表予定である。(以下の記録は2015年1月末現在のものであることをお断りしておきたい)。

○班員によるフィールドワーク

調査者：鳥羽 美鈴

調査テーマ：アジア系移民の実態調査及び資料収集

調査地：アメリカ・ロサンゼルス（カリフォルニア大学等）

期間：2015年2月18日～3月1日（12日間）

調査者：鳥羽 美鈴

調査テーマ：多民族の共生に関わる実態調査

調査地：シンガポール

期間：2015年3月5日～13日（9日間）

*上記2件は、いずれも本原稿執筆時（2015年1月末現在）における予定である。

○2014年度南アジア／インド班主催定期研究会

第6回定期研究会（2014年度第1回）

「故郷のための寺院、故郷としての寺院－インド移動商人マールワーリーによるヒンドゥー寺院運営」

講師：田中 鉄也氏（国立民族学博物館外来研究員、日本学術振興会特別研究員 PD）

日時：2014年7月4日（金）16:00～18:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

司会：鈴木 晋介

第7回定期研究会（2014年度第2回）

「“再帰的グローバル化”と音楽伝統の再生産－インド・ラージャスターンにおける世襲音楽家一族の100年」

講師：田森 雅一氏（東京大学大学院総合文化研究科・学術研究員、慶応義塾大学・埼玉大学・千葉大学兼任講師）

日時：2014年10月24日（金）16:00～18:00

場所：先端社会研究所セミナールーム

司会：鈴木 晋介

第6回の田中氏の発表では、インド・グローバル経済で躍進を続けるビジネス・コミュニティ「マールワーリー Marwari」による故郷への巨大ヒンドゥー寺院建立を中心に、詳細なフィールドワークと史料精査に基づいたグローバルな展開を示す歴史人類学的報告と、マールワーリー・アイデンティティの陶冶をめぐる議論が展開された。第7回の田森氏の発表では、北インド北西部ラー

ジャスターン州の州都ジャイプールに居住する、ミーラースイー *mīrāsī* と呼ばれるムスリム世襲音楽家一族の 100 年の系譜と歴史を題材に、再帰的グローカル化が進行する現代世界におけるインド音楽伝統の再生産についてローカルでミクロな視点から詳細な検討がなされた。

いずれの研究会においても、グローバル化の進展でいよいよ流動化傾向を強める現代インド世界のポテンシャルティとアクチュアリティのダイナミックの関係が両報告者の最新の調査報告によって浮彫りにされ、排除と包摂をめぐる諸事象の複雑さと創造性の問題を深く改めて考える契機になった。また、排除と包摂の二元論を超えるアクチュアリティという表現の問題系を考える際に、歴史・カースト・地域性・移動・ネットワークなどの多角的な文脈からの検討が必要であることも喚起された。

○関連成果発表

班員による調査研究成果も段階的に公表が始まっている。主なものを挙げておきたい。来年度も種々の機会を捉えて研究成果の公表を進めていく予定である。

Yasumasa SEKINE

The challenge of street anthropology : Hindu temple construction as street-edge phenomena under globalization, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014 Conference (IUAES), 16 May 2014, Chiba, Japan.

関根 康正

「殲滅されるべきは何なのか、カーストか、ジャーティか、ヴァルナか、あるいは不可触性か? (「不可触民」はヒンドゥー・カースト階層社会の単に最下層にいるわけではないことについて)」、第 19 回南アジア・インド洋世界研究会/KINDAS セミナー (2014 年 7 月 12 日, 於・京都大学)。

関根 康正

「ストリート人類学の展望」, 国立民族学博物館共同研究「ストリート・ウィズダムとローカリティの創出に関する人類学的研究」研究会 (2014 年 10 月 26 日, 於・国立民族学博物館)。

Shinsuke SUZUKI

Roadside Buddhas : 'Practicing Connection' against Fragmentation in Contemporary Sri Lanka, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences 2014 Conference (IUAES), 16 May 2014, Chiba, Japan.

鈴木 晋介

「ラフィングブッダー現代スリランカの民間信仰とグローバリゼーション」, 現代インド地域研究国立民族学博物館拠点 2014 年度第 4 回合同研究会 (2014 年 10 月 12 日, 於・国立民族学博物館)。

◆「中国国境域／雲南班」プロジェクト

代表：荻野 昌弘（関西学院大学社会学部教授）

「中国国境域／雲南」班は、昨年度までに引き続き、中国国境域に位置する雲南省の多民族社会において、市場経済の浸透に伴う少数民族の文化的変容と民族間関係の変化を通じて、欧米発の「排除」と「包摂」論では説明できない社会のあり方について実証研究に取り組んでいる。また今年度からは、班員である林梅（社会学部助教）を代表に、各班員および佐藤哲彦先端社会研究所副所長が研究分担者をつとめる科学研究費助成事業研究プロジェクト「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」（基盤研究（C））が採択され、それとも連動しながら研究活動に従事してきた。具体的には、8月に雲南省で実施した現地調査、学会発表や論文執筆を通じた研究成果の公表、定期研究会の開催に分けることができる。

○現地調査

2014年8月1日から8日にかけて、中国雲南省新平イ族タイ族自治県の県城および戛洒鎮を中心に現地調査を実施した。日本からは、荻野・林のほか、班員である西村正男（社会学部教授）・村島健司（先端社会研究所専任研究員）、共同プロジェクト全体統括者である金明秀（社会学部教授）、そして研究協力機関である雲南省社会科学院からは李永祥氏が参加した。

新平県県城では、少数民族の一面的な文化を前面に押し出した政府による大規模な文化的再開発が進められている現状を確認し、政府が建設した「文化広場」においてそれらが表象されていることを考察した。また同時に、漢族や回族を中心とした旧来の県城における主流文化が、彼／彼女自らの手によって再開発されていることにも注目した。

一方、戛洒鎮では、イ族・タイ族・ハニ族・漢族と異なる特徴を持つ村落を訪ね、それぞれの文化や民族間の関係性が歴史的にどのように形成されてきたのか、また市場経済の浸透に伴う政府主体の文化的再開発の中で、そうした文化や関係性が今日においてどのように変容しているのか／変容していないのかについて、聞き取り調査を実施した。

現地調査の成果については、次にあげる本年度の研究成果において一部が反映されており、また来年度以降も引き続き現地調査に基づく成果を公表していく予定である。

○研究成果の公表

今年度の研究成果の公表は、大きくふたつに分けることができる。ひとつは「中国国境域／雲南」班が共通で取り組んできた課題についての研究成果であり、もうひとつはそこから派生する各班員個別の研究課題に対する取り組みである。

前者としては、村島と林が主に2013年度に実施した雲南省新平県県城における調査結果を整理し、日中社会学会第26回大会（6月7-8日、於：大同大学）において、「グローバル化の中における文化変容：雲南省新平イ族タイ族自治県を事例に」と題する研究発表を行った。そして、この研究発表を基礎に、8月の現地調査で得られた戛洒鎮でのデータを加えて、村島・林・西村・荻野の共同執筆による「国家のはざまを生きる - 雲南省新平イ族タイ族自治県における文化的再開発

」と題する論文を、『先端社会研究所紀要』第12号（2015年3月）に発表した。

後者として、荻野は2014年5月に共編著『3・11以前の社会学－阪神・淡路大震災から東日本大震災へ』（生活書院）を発表した。荻野はさらに、7月に開催された第18回ISA世界社会学会議（於：パシフィコ横浜）にて、“Postmodern View of Time in Sociology”と題する研究発表を、また12月に開催された第50回環境社会学会大会（於：龍谷大学）シンポジウム「環境社会学から振り返る「戦後」－戦後日本社会の変動と環境社会学の歩み」にて、「社会学者はどこまで時空認識を拡げることができるか－「戦後史」を超えて」と題する研究発表をそれぞれ行い、「中国国境域／雲南」班による共同研究の成果について言及している。そのほか、「排除」の問題に関して、2015年3月に共編著『現代の差別と排除をみる視点』（明石書店）を刊行した。

同じく林は、2014年11月に単著『中国朝鮮族村落の社会学的研究－自治と権力の相克』（御茶の水書房）、12月に論文「「与えられた」選択としての国際結婚」『東アジア研究』（大阪経済法科大学アジア研究所発行）をそれぞれ公刊している。林による中国朝鮮族の事例は、2015年度に研究成果の発表を予定する村島の台湾の事例とともに、「中国国境域／雲南」班の研究課題に対して、国境域の地域間比較という新たな視点をもたらす可能性を有する。

○定期研究会

共同研究「中国国境域／雲南班」第3回研究会（科学研究費・基盤研究（C）「中国雲南省の少数民族における文化変容に関する社会学的研究」との共催）

日 時：2015年1月13日（火）15:30～17:30

場 所：社会学部セミナールーム2

報告者：李 永祥（社会学部客員教授／中国雲南省社会科学院民族文学研究所研究員）

題 目：Ethnic Tourism and Cultural Change in Xinping, Yunnan Province, China

司会者：村島 健司（先端社会研究所専任研究員）

李永祥氏は災害人類学や環境人類学を専門に、雲南省少数民族に関する数多くの著作を発表している中国で最も有名な人類学者の一人である。当日の講演では「エスニック・ツーリズム」という観点から、改革開放以降の市場経済が少数民族居住地域にまで浸透する過程で、各少数民族の文化や伝統が観光資源として政府や企業によって創造され再編成されていく様子が、長年にわたるフィールドワークの実践の中から明らかにされた。またその後の質疑応答における議論を通して、「中国国境域／雲南」班が市場経済の浸透に伴う排除と包摂についての研究を継続するにあたって、「民族」という概念についても脱構築しながら、研究を進める必要があることが示唆された。

◆「日本班」プロジェクト

代表：山 泰幸（関西学院大学人間福祉学部教授）

本年度は、サバティカルから戻った山泰幸・人間福祉学部教授が班長に復帰し、島村恭則・社会学部教授が副班長となった。日本班は、昨年度に引き続き、「排除」と「包摂」をキー概念として、

日本社会におけるマイノリティとマジョリティの双方を射程にいれながら、国際的な視野で研究プロジェクトを推し進めた。済州大学校在日済州人センターとの共同研究によるフィールドワークなど、「在日」を主題にした研究を一つの柱としている。また、在日コリアンあるいは在日済州人を国際的な視野から検証すべく、日本以外の地域に定住するコリアンについての研究も行われた。その成果の一つとして、山教授が本研究所の全体研究会（2015年2月11日）で「排除と包摂のはざままで—パリのコリア系住民のフォークロア研究から—」と題する報告を行い、中国や南アジアなどを対象地域とする他のプロジェクトの班員らも交えて議論を行った。島村教授は、民俗学の視点から「フィールドワーク」そのものを問い直す作業を行い、その成果は IUAES Inter-Congress 2014（2014年5月）といった国際会議での発表や「フォークロア研究とは何か」『日本民俗学』（287号）といった論文などを通じて出されている。

昨年度のシンポジウム「グローバリゼーションと他者問題 —現代日本・韓国・オーストラリアの排外主義」（2014年3月）で議論された「ヘイトスピーチ」も、日本社会における排外主義の一つとして、今年度も検証作業が進められた。沖縄でフィールド調査を行った金明秀・社会学部教授は、関西社会学会大会シンポジウム（2014年5月）で「日本における排外主義の規定要因——同化と排除の共同関係を中心に」と題する報告を行った。また、12月には大阪大学で「ヘイトスピーチとは何か」をテーマに一般向けの講演をした。ほかに、これまでの研究をもとに、難波功士・社会学部教授が『「就活」の社会史 大学は出たけれど』（祥伝社、2014年）、辛島理人・専任研究員が『帝国日本のアジア研究 総力戦体制・経済リアリズム・民主社会主義』（明石書店、2015年）といった著作を発表した。プロジェクトの最終年となる2015年度も、引き続き研究および成果発表を活発に行う予定である。

先端企画セクション活動報告

先端社会研究所所長 盛山 和夫（関西学院大学社会学部教授）

1. はじめに

先端企画セクションは、2014年度から、先端社会研究所規程の第2条および3条に掲げられた本研究所の研究目的を踏まえつつ、「2016年度以降の先端社会研究所の研究プロジェクトの企画および本研究所の活動・組織の再検討」に関わるワーキング・グループとして設置された。より具体的には、以下の事項について、研究と検討を推進するものとされている。

- (1) 2016年度以降において先端社会研究所が遂行するのが適切と思われる研究プロジェクトおよび研究体制のありかた
- (2) 先端社会研究所における研究の発展を促進するための方策
- (3) 先端社会研究所の広報活動の強化

なお、これらの検討のために必要とみなしうる、研究会、セミナー、講演会、シンポジウム、ワークショップなどの開催についても企画、実施する、となっている。

本セクションの構成メンバー（2014年度）は次の通り。

盛山 和夫（先端社会研究所所長・関西学院大学社会学部教授）
佐藤 哲彦（先端社会研究所副所長・関西学院大学社会学部教授）
山口 覚（先端社会研究所運営委員会委員長・関西学院大学文学部教授）
今井 信雄（関西学院大学社会学部教授）
榎本てる子（関西学院大学神学部准教授）
鈴木 謙介（関西学院大学社会学部准教授）

2014年度は、次のような事業計画を立てた。

- (1) セクション・メンバーによる定期的な meeting を開催し、検討課題についての検討を進める。
- (2) 「グローバル化と他者問題」を共通テーマとする連続セミナーとして「先端研セミナー」を開催する。開催頻度は、1、2ヶ月に1回程度。講師は、関西学院大学内外において本共通テーマを先端的に研究している研究者に依頼する予定。
- (3) 講演会、シンポジウム、ワークショップ等の企画・開催。
- (4) その他、本セクションの設置目的に必要なとみなしうる活動。

2. 2014年度の活動

(1) 先端研セミナー

先端研セミナーは、3回開催された。各回の内容は以下の通り。

第1回先端研セミナー

講師：落合 恵美子氏（京都大学大学院文学研究科教授）

タイトル：現代アジアの家族変容——自己オリエンタリズムの罨

日時：2014年6月25日（水）15時30分～18時

会場：関西学院大学先端社会研究所セミナールーム

参加者数：約60名

概要：

落合氏の講演内容は概ね以下の通り。1970年くらいまでは、日本における家族とジェンダーの変化は欧米のそれと同じ方向に歩んでいたが、それ以降、欧米社会と異なる道をとるようになった。欧米社会では女性の労働力率が軒並み上昇したのとは対照的に、日本ではM字型が残り、いまだに女性の活用が課題とされている。また、出生率低下、離婚の増加など、欧米社会で見られるのと同じような家族の変化が日本でも起きたが、同棲や婚外子出生は少ない。こうした特徴はある程度は他のアジア諸国にも共通している。その原因は何だろうか。ここでは文化的要因に答えを求める大方の見方とは異なり、韓国ソウル大学の張慶燮（Chang Kyung-Sup）教授の概念を使うと、日本が半-圧縮近代で、韓国など他のアジア諸国は圧縮近代という特性として捉えることができ、そのもとで全体として「家族主義」を維持しながらの近代化であったと見ることができる。そこにはまた、「アジア」をめぐる「文化の地政学」として、自己オリエンタリズムへの誘惑が存在していて、西洋への対抗心から東洋的な「良妻賢母」という理念が新たに近代において発明されたりした。これからのアジア諸国は、そうした自己オリエンタリズムの罨をどう克服していくかという課題に直面している。

・・・以上のような講演のあと、フロアーからアジアにおける少子化の要因や福祉政策などをめぐって活発な討論が行われた。

第2回先端研セミナー

講師：谷 富夫氏（甲南大学文学部教授）

タイトル：都市とエスニシティ——人口減少社会の入口に立って——

日時：2014年10月29日（水）15時30分～18時

会場：関西学院大学先端社会研究所セミナールーム

参加者数：約30名

概要：

谷氏の講演内容は概ね次の通り。日本社会が人口減少に直面しているなかで、移民に対して賛成論と反対論があるが、それについては都市エスニシティの考察をふまえて移民という問題

について正面から向き合っていかなければならない。都市社会学ではワース以来、異質性が一つのテーマになっているが、日本では、1980年代の半ばくらいから都市社会学の中から都市エスニシティ研究が盛んになり、私も1987年から大阪生野区で調査を始めた。ただ、都市コミュニティ的研究に対しては、労働市場論などからの批判もある。異なる議論を受け止めて、統合的に考える視点を構築していくことが必要だろう。民族関係の可能性を考える上で、猪飼野は意義のあるフィールドだと考えられる。そこでは大勢の在日韓国人・朝鮮人の人が何世代にもわたって住み続けており、そこでの「共生」のありかたを考察することを通じて、symbiosis から conviviality に至るプロセスの条件を考えることができるのではないだろうか。

・・・以上のような谷氏の講演は、日本における異なるエスニシティの「共生と統合」というテーマについて、日本における研究の歴史やご自身の調査体験などを振り返りながら、諸概念を整理し、新しい理論枠組みの構想を展開するという内容であった。

講演の後、フローワーからのさまざまな質問に対しても丁寧に応答がなされ、学術的にたいへん意義のあるセミナーであった。

第3回先端研セミナー

講師：上野 千鶴子氏（立命館大学特別招聘教授／東京大学名誉教授）

タイトル：安倍政権「女性活躍社会」の本気度

日時：2014年12月4日（木）17時～19時

会場：関西学院大学社会学部 101 教室

参加者数：約 150 名

概要：

上野氏の講演内容は概ね次のようであった。安倍政権は、それまでの保守的な家族観を忘れたかのように、このところ「女性活躍」に積極的である。しかし、日本社会における女性の地位は、国際的にみて極めて低い。GEM（ジェンダーエンパワメント指数）で58位、GGI（男女平等指数）では105位という状況である。国政や地方自治体における女性政治家の数も著しく少ない。民法などの法制度上の差別も依然として残っている。もっとも、労働法制は改善された。にもかかわらず雇用差別はなくなっていない。実は、ジェンダー平等法制の整備に一方で雇用の柔軟化が進んできており、「女性と若者は使い捨て」といった傾向が増している。小泉構造改革のネオリベ路線を受け継ぐ安倍経済政策のもとでは、「女性活用」はたしかに本気かも知れない。というのも、女性は、人口減少期に入った日本に残された最後の資源、寝た子をたたき起こしても活用したい労働力だからである。だが政策を見ると、その「使い方」が完全にまちがっている。働き方のルールを変更しないまま、男並みに使える女は使い倒し、そうできない女は「二流労働者」として使い捨てるような政策になっている。また、日本的経営のもと、日本企業は性差別から利益を得てきた面もある。しかし、少子化対策という観点で見ても、非正規雇用よりも正規雇用の女性の方が、婚姻確率も出産確率も高い。また、規模はやや小さくても平等均衡型企业の方が、売上高経常利益率が高いというデータもある。女性にとつての多様な生き方を可能にするような政策への転換のためには、黙ってはいけな

・・・実際の講演はユーモアを交えた洒落な語り口で、大勢の聴衆が聞き入っていた。討論でも、学部生や一般市民の人など、研究者以外から活発に質問や意見が出され、たいへん盛り上がったセミナーであった。

(2) シンポジウム

タイトル：「グローバリゼーションの中の移民」

日時：2015年2月27日（金）13:00～17:10

会場：関西学院大学上ヶ原キャンパス 図書館ホール

参加者数：約70名

趣旨：

グローバリゼーションが進む中、国境を越えた人びとの移動がさまざまな形で注目を集めている。そこには、理念としての多文化共生社会への希望がある一方で、現実には、移民排斥運動やヘイト・スピーチなど数々の深刻な問題が生まれている。本シンポジウムは、ヨーロッパおよび日本における問題状況について、この分野を代表する3名の研究者からの報告をもとに、「グローバリゼーションの中の移民」に関する現実分析と理念的・規範的な観点からの考察とを深めていくことをめざした。

報告者と内容

(a) 二階堂 裕子氏（ノートルダム清心女子大学文学部准教授）

タイトル：「『非定住型』外国人との連帯の可能性——ベトナム人技能実習生を事例として」

報告の概要：滞在期間を制限された外国人労働者の事例として、ベトナム人技能実習生を取り上げ、彼／彼女らと日本人の間にはいかなる関係が構築されているのか、またいかなる関係を構築することが望ましいのかが検討された。日常的に囲い込まれがちで「顔の見えない存在」となってしまう実習生に対して、職場や地域社会における日本語学習を通じての交流が、相互の連帯的な関係を育む可能性があるという展望が示された。

(b) 丹野 清人氏（首都大学東京都市教養学部教授）

タイトル「ニセ日系人問題から考える日本の外国人受け入れ」

報告の概要：今日、日本政府は人口減少社会のなかでの少子高齢化対策の一つとして、外国人労働者の活用の拡大と移民受け入れの必要性を議論しはじめているが、そこでは、これまで日本がどのように外国人労働者を受け入れ、処遇してきたのかはほとんど省みられていない。「ニセ日系人」として誤って収監された事例をもとに、入管行政にどんな問題があり、日本の外国人労働者受け入れで何が足りていないのかが示された。

(c) 宮島 喬氏（お茶の水女子大学名誉教授）

タイトル：「移民の包摂と〈他者化〉とは何か——ヨーロッパの若干の国にみる三重基準から」

報告の概要：「移民」と「ヨーロッパ人」の関係は幾つかの国では内在化している（仏元大統領、現首相は共に移民二世）。しかし高技能移民を求める一方、新規移民には同化に近い強い「統合」政策を適用し、結果的に「他者」をつくりだしている。また文化による差異化も「他者

化」の一次元をなし、メディアが媒介する「イスラモフォビア」も無視できない。本年1月7日のシャルリー・エブド事件にも触れながら、ムスリム系移民が「他者」化される問題構造が示された。

討論：以上3つの報告の後、お二人のコメンテーターからのコメントと質問があり、フロアーを交えて活発な討論が行われ、やや予定時間を超過して終了した。

コメンテーター

蘭 信三氏（上智大学総合グローバル学部教授）

陳 立行氏（関西学院大学社会学部教授）

司会

今井 信雄氏（関西学院大学社会学部教授）

(3) 第1回先端研ワークショップ（予定）

タイトル：「ワールド・カフェでケアについて考える」

日時：2015年3月9日（月） 13時～16時30分

場所：先端社会研究所セミナールーム

カフェ・マスター：野村 裕美さん（同志社大学社会学部社会福祉学科准教授）

スピーカー：Aさん（LGBT等当事者）

趣旨：先端研ワークショップでは、セミナーやシンポジウムのように「研究者の話聞く」というのではなく、むしろ「人と一緒に考える」という機会をつくり出すことをめざしている。

第1回目として、困難を抱える当事者のお話を聞き、それを踏まえて参加者同士で、ワールド・カフェという対話形式を体験しながら、ケアについて話し合う形で開催した。それにより「私たちが当事者の方とどのようにしたら十分にコミュニケーションできるのか」「私たちが当事者の方を支援するとしたら何ができるのか」について考え、それと同時に「人と一緒に考える」ための、ワールド・カフェという対話形式を体験することが目的である。